

総合的な学習の時間のカリキュラム開発の歩み

— 山梨大学教育学部附属中学校の研究の足跡とこれからの展望 —

Integrated Learning Time Curriculum Development History:
Research Trail and Future Prospects of Junior High School Attached to the
Faculty of Education, University of Yamanashi

森澤 貴之¹ 奥田 陽介¹ 古屋 久美¹
MORISAWA Takayuki OKUDA Yousuke FURUYA Kumi

要約：これまでに本校で実施されてきた総合的な学習の時間の授業は、その実施に際し戸惑いを覚える職員が多いという声をよく耳にする。その理由としては、「本校に赴任する職員の多くは、県教育委員会の交流人事で赴任する」、「独自のカリキュラムのもとで授業が展開されており、実際に授業を経験した職員しかその様子がわからない」、「職員間で温度差がある」ということが理由として挙げられた。本論文では、本校のカリキュラム開発の歴史を踏まえ行った実践を紹介する。実践を通して、明らかになった成果と課題、今後の展望についても論じたい。

キーワード：総合的な学習の時間、探究的な学習、教科横断的なカリキュラム、SELF

I 本校における総合的な学習の時間の変遷について

本校では、平成11年から平成13年にかけて文部省（現在の文部科学省）の研究指定を受け、総合的な学習の時間のカリキュラム開発を行った。その中で、総合的な学習の時間ことを本校独自の「SELF（セルフ）」という名称にした。このSELFには「自分づくり」という考え方が含まれており、総合的な学習の時間を通して主体的に他と関わりながら、「自分づくり」を積極的に進めていく生徒の育成を目指すことを狙いとしていた。SELFのそれぞれの文字には、以下の願いが込められている。

S	… Search（探究する）
E	… Experience（体験する） Enjoy（楽しむ）
L	… Life Planning（生き方）
F	… with Friends（友人と協力・協働して）

1 SELFの各領域について

SELFは「SELF-A」、「SELF-B」、「SELF-C」、「CML（コンピュータ・メディア・リテラシー）」の領域があった。表1、表2に各領域の概要、ねらい、各学年の発達段階におけるテーマを示す。

¹ 山梨大学教育学部附属中学校

表1 SELFの各領域, 扱う内容, ねらい

SELFの4領域	扱う内容	ねらい
①SELF-A	生き方学習	<ul style="list-style-type: none"> 自己を見つめるとともに、人間関係を作る力の育成。(パーソナルエデュケーション, ソーシャルスキル) 自分の将来を見据え、適切な方向に自分を仕向けていく力の育成。(キャリアガイダンス)
②SELF-B	「環境」, 「国際」, 「福祉」の3分野からなる総合学習	<ul style="list-style-type: none"> 「知識の総合能力」や「問題解決能力」, 「コミュニケーション能力」といった力の育成。 21世紀の社会で直面すると考えられる問題を「自分の生き方」と関連させて正面からとらえさせること。 社会参加への意識を持たせること。
③SELF-C	個人による総合探究学習	<ul style="list-style-type: none"> 生徒は1, 2年生で追求してきたSELF-Bの課題内容(環境・国際・福祉)の中から自らがそれぞれの興味・関心から課題を立ち上げ, 「情報活用能力」や「コミュニケーション能力」を駆使して自らの計画に沿って迷いながらも課題を追求し, 自分なりの結論を導くこと。
④CML (コンピュータメディアリテラシー)	コンピュータの利活用をはじめとする使用上の注意や検索方法やタイピングと言った基本的な技能を習得する。	生きた情報活用能力の育成。

表2 立ち上げ時の各学年におけるSELFのテーマ

成長過程	1年生前期	1年生後期	2年生前期	2年生後期	3年生前期	3年生後期
SELF-Aのテーマ	中学校生活への適応	自己を見つめる	集団の中の自分	社会を見つめる	将来を見つめる	進路決定期を迎えて
SELF-Bのテーマ		福祉	環境	国際		
SELF-Cのテーマ					個人探究学習	個人探究学習

2 平成18年(2006年)のSELFカリキュラムの見直し(第1次)

平成14年以降は、開発したカリキュラムに沿って授業が進められた。しかし、校内研究が教科研究中心に移行したこともあり、学校体制でSELFの研究を推し進めることがなくなり、徐々に細部の実施方法は学年ごとに工夫して進めるような形となっていた。学習指導要領の改訂が迫った平成18年にSELFのカリキュラムの見直し、再編成が行われた(表3)。

表3 SELFについての学習の見直し

1 学年		
メディア活用		調べ方、学習の仕方、パソコンでの情報収集、書籍などを使った情報収集の仕方などコンピュータを含めた情報活用能力を高める学習。
SELF-B	福祉	共に生きる、バリアフリーについて体験を行い、レポートを書く。情報活用能力を生かす。自分自身の課題を設定する。レポートを書き、発表する能力、表現力を高める学習。
2 学年		
SELF-B	環境	若桐のつどい（林間学校）を通しての自然体験。
SELF-A	職場体験学習	自分の選んだ職種へ実際にいって体験，見学する。生き方学習。
SELF-B	国際	山梨大学の留学生と交流会を持つ。テーマの中から選択し，そのテーマに沿って自分なりの課題を設定し，交流会の中でアジアの留学生と意見交換し，交流する。
3 学年		
SELF-C	卒業論文	これまでのSELFの学習をふまえて自分なりのテーマを設定し，レポートを仕上げる。

3 平成26年（2016年）におけるSELFカリキュラムの見直し（第2次）

第2次のカリキュラムの見直しにより，学校全体で系統性を重視して指導を行うSELFの土台が作られた。その際のポイントを以下4点にまとめる。

①体験的な学習を行う。

若桐のつどい（1年：県内めぐり，2年：林間学校，3年：修学旅行）や職業体験（2年）などとの関わりを考えていく。

②探究的な学習を行う。

表4に示す学習過程を意識した，問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動を設定していく。生徒の実態に合わせて，その中から1つにしばって，重点的に指導していくが，常に発信までを意識した学習のサイクルを意識していく。

表4 生徒に身につけさせたい力と探究の過程，学習活動の関わり

身に付けさせたい力	探究的な学習の過程	主な学習活動
【課題設定能力】	①課題の設定・探究の計画	課題設定・計画立案
【情報収集能力】	②情報の収集	事前調査・体験活動
【情報選択能力】 【情報分析能力】	③整理・分析	学習発表会に向けた準備やレポート作成
【表現力】	④まとめ・表現	発表やレポートをまとめた冊子作成
	⑤共有	発表・掲示
【自己省察力】	⑥評価・振り返り	自己評価・他者評価

③協働的な学習を行う。

他者と協働して課題を解決しようとする学習活動を仕組んでいく。また、外部講師などを活用し、人とのつながりの中で学んでいく。

④3年間の学習計画（表5）

表3 3年間のSELFの学習計画

1 学年 前期は若桐のつどいを中心に据えた調査体験学習 後期：探究的な学習		
若桐のつどい	(4月～5月) 「山梨 再発見！ ～私たちに何が できるのか～」	*課題設定能力 ・体験学習の流れをつかむ。(人間関係づくりも含めて) テーマ設定, 調査・体験の企画, 情報収集, 体験学習, レポート作成, 発表の流れを学習。
メディア活用	(6月～7月) 「山梨 再発見！ ～パンフレット で伝えよう～」	*情報収集能力・レポート作成能力 若桐のつどいに向けての情報収集と同時進行で行う。 パソコンでの情報収集, 書籍などを使った情報収集の仕方 などコンピュータを含めた情報活用能力を高める学習。 クラス発表→学年発表 ・国語科 さまざまな形態の文章・数学科 統計資料
SELF-B 「ニホンジカと ニホンカモシカ」 「富士山学習」	探究的な学習 「私たちの富士山 ～富士山の魅力 を発信しよう～」 (9月～3月)	*探究的な学習のサイクルを知る・情報の整理・分類能力 情報活用能力を生かす。自分自身の課題を設定する。 レポートを書き, 発表する能力, 表現力を高める学習。 クラス発表 → 学年発表 「富士山学習」においては, 外部講師を活用(2回)
2 学年 前期は若桐のつどいを中心に据えた調査体験学習 後期：探究的な学習		
SELF-B 「メディア活用」	若桐のつどい 「若桐のつどい新 聞で発信しよう」 (4月～5月)	*レポート作成能力 若桐のつどい新聞の作成を目指し, 新聞について知る学習。 新聞の紙面構成(比較読み)や記事の書き方についての学 習, メディア(テレビニュースと新聞)による情報の伝わり 方の違い 新聞作成 → クラス発表 → 冊子の作成 ・国語科 さまざまな形態の文章 ・美術科 レタリング
SELF-A 「生き方学習」 キャリア教育との 関わり	職場体験学習 (6月～9月)	*情報収集能力・レポート作成能力 自分の選んだ職種へ実際にいって体験, 見学する。生き方 学習。体験希望先へのアポ取り, 体験, レポート作成, 発表 → 学園祭での展示 ・国語科 さまざまな形態の文章 「職場体験学習」においては, 外部講師を活用(1回)
SELF-B 「国際理解」	国際理解 「日本の古典・伝 統芸能再発見～ 受け継がれてき	*課題の設定・情報の収集・プレゼンテーション能力 修学旅行での見学・体験を目標に日本の文化に対する学習 を進める。4月の修学旅行実施まで含める。 プレゼンテーション

	た心を伝えよう ～ (9月～3月)	・国語科 話すこと・聞くこと(プレゼンの仕方) 古典 芸能 ・社会科 歴史分野 ・音楽科 古典芸能の鑑賞
3学年 若桐のつどいを中心に据えた調査体験学習, 探究的な学習		
SELF-B	国際理解(日本の文化)「修学旅行記を編集しよう」 (5月～7月)	*レポート作成能力 修学旅行の体験を基に修学旅行記を作成する。 クラス発表 → 学園祭での展示 ・国語科 さまざまな形態の文章・美術科 レタリング
SELF-C	卒業論文 (6月～2月)	*3年間のSELFのまとめ。これまでのSELFをふまえて、自分なりのテーマを設定し、卒業論文(レポート)を仕上げる。 発表会を企画し、クラス・学年内での発表を行い、冊子作成

4 現在のSELFについて

第2次のカリキュラムの見直しを受けて、現在実施しているSELFは、図1に示す「グランドデザイン」に沿った形で行われている。グランドデザインの至る所に①～⑥が入っており、これは「探究サイクル」の中で、資質・能力の育成のどの部分に特に力を入れたのかを示している。

1学年では、課題設定能力の育成に特に力を入れ、実践を行っている。2学年

では、情報の分析や表現力の育成に特に、力を入れ、実践を行っている。3学年では、生徒が自身の興味・関心のもとテーマを決定し、これまで探究のサイクルで身に付けてきた資質・能力を存分に発揮して、総合的探究学習(卒業研究)に取り組んでいる。

山梨大学教育学部附属中学校 総合的な学習の時間(SELF) 3年間の学習の流れ

領域 … 学習課題を設定して探究する学習
 M活(Mメディア活用) … 探究する学習を支えるスキルを身につける学習
 生き方 … キャリア教育と関連する学習(特別活動・学校行事・道徳・各教科とも関連)
 資質・能力(特に力を入れたものを明記) : ①課題設定能力 ②情報収集能力 ③情報選択能力 ④情報分析能力 ⑤表現力 ⑥自己省察力
 ※すべての領域において、主体的な態度及び協働的な態度を育成する

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年(基礎期) 50時間	領域	★オリエンテーション		地域「ふるさと山梨とわたしたち」			環境「二ホンジカと二ホンカモシカ」			環境「富士山と私たち」IIは2年で学習			
	M活		★メディアを扱う(基礎理解)						★メディアを扱う(応用)	インターネットや書籍の活用スキルを身に付ける			
	生き方									自分の得意について考えよう			
	資質・能力									①		②・③・④	
2年(充実期) 70時間	領域	環境「富士山と私たちII」			国際理解(日本の伝統文化と私たち)			国際理解「22世紀に残したい日本の〇〇I」IIは3年で学習					
	M活				新聞を作成して発信しよう(校外学習)								
	生き方	職場体験学習											
	資質・能力			③・⑤				①・④				④・⑤	
3年(発展期) 70時間	領域	国際理解「22世紀に残したい日本の〇〇II」		総合的探究学習「卒業論文」									
	M活	旅行記を作成して発信しよう(修学旅行)											
	生き方												
	資質・能力		⑥					①・②・③・④・⑤・⑥					

図1 本校の総合的な学習の時間のグランドデザイン

Ⅱ 本実践の意義

本実践は、これまで定期的に見直しをされてきたSELFの変遷を踏まえ、筆者がSELF担当として行った3年間の教育実践をまとめ、報告している。実践から明らかとなった成果と課題および今後の展望について論じ、本校のSELFの更なる発展に寄与したい。また、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けながらも、オンラインを活用して学びを止めることなく進めてきた教育実践であり、学びを止めない教育の一つの形を提案することができるものとする。

Ⅲ 授業実践の実際（令和2年度 1年次）

1 領域 オリエンテーション SELFガイダンス（探究学習のスタート）

中学校3年間の探究学習のスタートとなるガイダンスを行った。ガイダンスでは、3年間を通してSELFでどのような資質・能力を身につけていくのかを生徒に提示し、3年間のSELFの学習の見通しをもたせた。（図2）

令和2年 緑学年 SELFガイダンス

「SELF」を日本語にすると...?
自分自身
附属中の「SELF」には...
Search (探究する)
Experience, **E**njoy (体験する,楽しむ)
Life Planning (生き方設計)
with **F**riends (友人と協力して)

Search (探究する)
探究的な学習
・調べ学習とは違う！
・課題を決め、その解決を目指す！
・学び方も学ぶ！

調べ学習の例
・山梨県で生産がさかんな果物は何か
・日本の人口はどのように変化しているか
・地球温暖化とはどのような問題か

探究的な学習の例
・山梨県ではなぜぶどう作りがさかんなのか
・どうすれば日本の人口減少が防げるか
・温暖化を食い止めるにはどうすればよいか

Experience, **E**njoy (体験する,楽しむ)
体験的な学習
・実際に体験する中でしか分らないことがある。
・学ぶ楽しさを体験してほしい。

Life Planning (生き方設計)
自分の生き方を考える
・自分の生活や行動について考える。
・学ぶ意味や価値を考える。
・"自分自身"の生き方につなげる。

with **F**riends (友人と協力して)
協働的な学習
・友人と力を合わせて取り組む。
・学びや見方・考え方に広がりや深まりが生まれる。

具体的な内容
◎ 領域別探究学習
1, 2年次 テーマのもと行う探究的な学習。集団での活動がメイン。
◎ 生き方学習
3年間 自己や将来を見つめる学習。
◎ 総合的な探究学習 → 卒業論文
3年次 卒業論文。自分の興味・関心に応じて行う探究的な学習。個人で作成していく。
◎ メディア活用 (略して"M活")
目的に応じてメディアを選択し、情報収集や情報選択、情報分析を行う能力を磨く。

大きく変化する社会の中で、自ら学び、問題を解決しながら、よりよい社会や生活を築く力を身につけていこう！
一人ひとりが
「自分自身 (= SELF)」
のこととして、積極的に取り組もう！

図2 SELFのガイダンス内容

2 M活「図書館利用について」

ガイダンスの次の時間に、司書教諭とのTT体制で、本やPCの検索機能といったメディアの利用方法全般を学ぶことを目的とし、授業を行った。授業の流れは、本校司書教諭が作成した教材をもとにして、本の情報の見かた(図3)と本とインターネットの違いについての学習を行った。特に、「情報の正確性」、「情報の信頼性」、「本とインターネットの共通点と相違点」について思考ツールであるベン図を用いて比較し、学習を行った(図4)。その後、学習した内容をもとにして、仲間に「本を紹介する活動」を行った(図5)

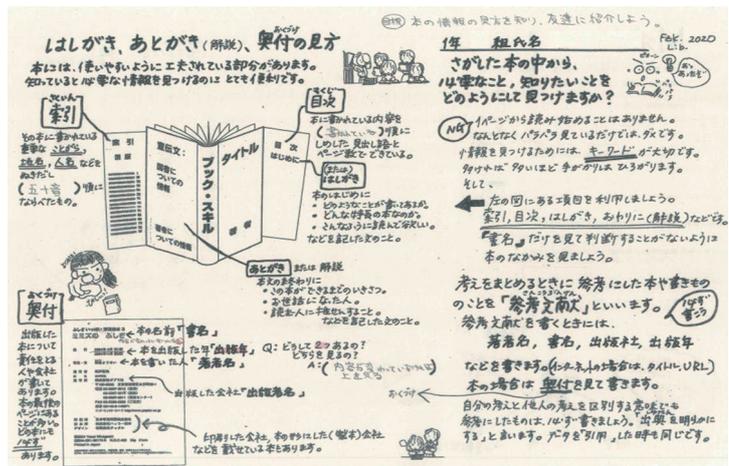


図3 本の情報の見かた

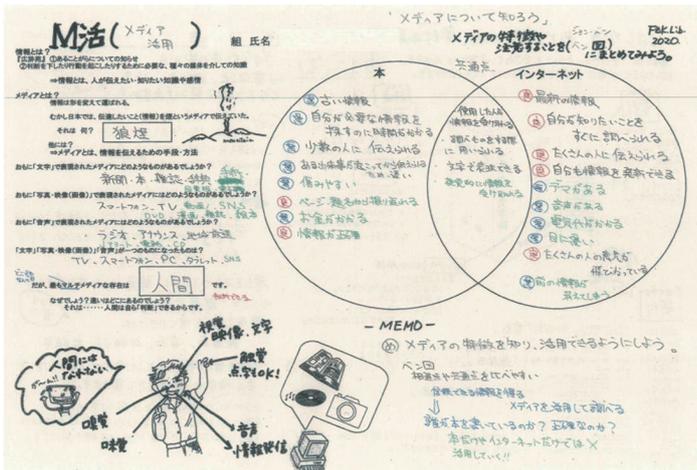


図4 本とインターネットの違いのベン図

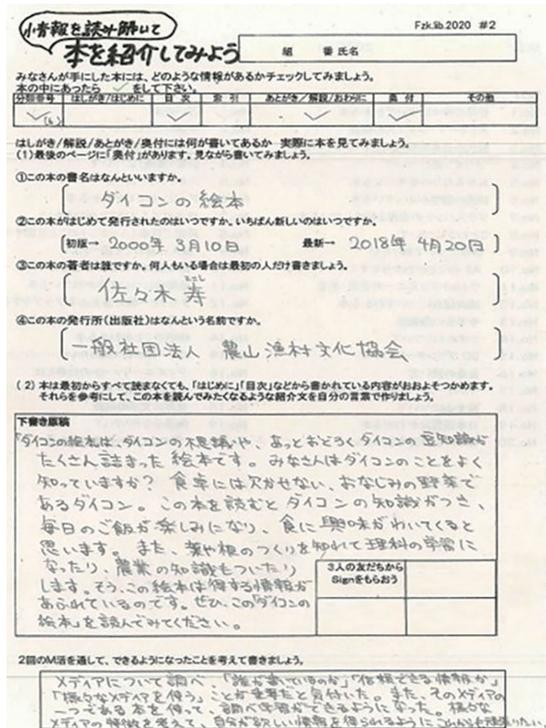


図5 本を紹介しようの内容

3 M活「PC利用について」

山梨大学工学部の大学院の学生を講師に招き、PCの利用主に「検索」、「保存」についてのコツと注意点について学んだ。(図6)。

【検索】をする際のコツ・注意点 【保存】をする際のコツ・注意点

- 検索をするときは単語で区切る
- 新しいタグで検索する
- ホムページ的安全性を確かめる
- 鍵のマークが点滅しているか確認
- 11のその情報をみながら取る
- 正しい情報を得る
- ページの中を検索する(Ctrl+F)
- タグを作成
- 予備をとる
- USBの注意点
- 上り名前をつける
- PDFを作成する

図6 検索および保存する際に重要なことのメモ

・小さな問い…課題について自分が気になった疑問。小さな問いには、調べることで解決するものと解決しないものがある。

(例) 調べれば解決する問い：富士山の高さは何mだろうか

調べても解決しない問い：富士山は山梨側と静岡側のどちらが美しいのだろうか

・大きな問い…解決できなかった小さな問いがもとになって作られる問い。その解決には多面的・多角的に物事を捉えたり、自分なりの考えも組み込まないと結論が出ない

(例) 大きな問い (課題設定)：なぜ富士山は山梨側と静岡側のどちらが美しいという議論が起こるのだろうか

問いのレベル (定義)

- ・レベル1；単純な問い (Yes, Noで答えられるもの)
- ・レベル2；本やインターネットを活用して少し調べれば答えがわかる問い
- ・レベル3 (それ以上)；かなり調べても答えがわからなかった問い (多面的に情報を集めることと自分の考えを合わせることで答えが得られる)。大きな問いになりうるものは、問いのレベルでいうとレベル3を指す。

本領域の授業は、以下の①から⑦の流れで展開した。①OPPシートを用いて、ニホンジカ、ニホンカモシカの共通点と相違点、知りたいと思うことを5W1Hにならってかきださせた (図9)。②KJ法で同じ内容の付箋同士をグループ分けさせ、そのグループを視点とした。(図10) ③視点に関わるニホンジカ、ニホンカモシカに関する問いを作らせ、その解決のために情報収集を行った。情報収集を通して、生徒たちに解決できた問いもあれば解決できなかった問いがあることを自覚させた。

④生徒たちにニホンジカ、ニホンカモシカに関する資料を与え、知識を得た状態で再度問いを作らせた。生徒自身が現地点でもっている知識をもとに作成した問いと資料を読んでから作成した問いを比較すると、後者の方が問いの内容がより具体的になり、その質が高まっているということを生徒たち一人ひとりに実感させた。⑤その後、4人1グループで大きな問い作りを行った (図11)。問い作りを行う際に、テーマ (ニホンジカ、ニホンカモシカ) と視点 (人間、自然) を与え、そこから興味・関心のあるものをテーマと視点をそれぞれ選び、大き

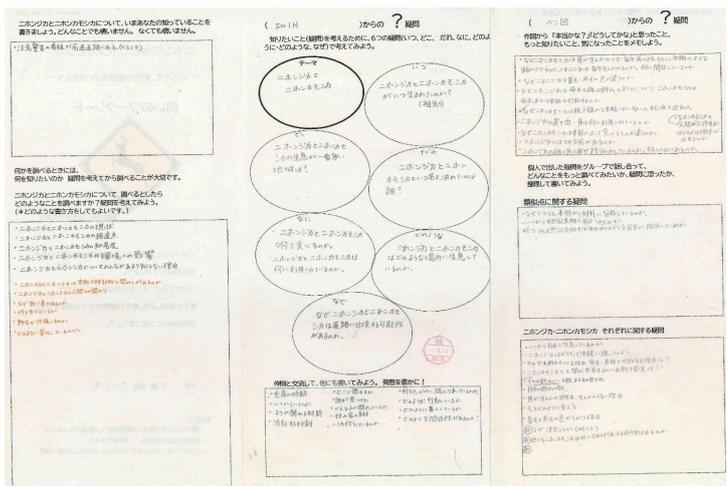


図9 ニホンジカ・ニホンカモシカのOPPシート



図10 KJ法でグループ分けした様子

な問いを設定した。⑥大きな問いの解決のために必要となる小さな問いを記入させ、4人で分担して情報を収集した。⑦情報収集した内容を元にして、厚紙2枚にまとめて発表を行った。その後A4のFAX原稿用紙を4分割して、4人で分担してまとめを行った(図12)。

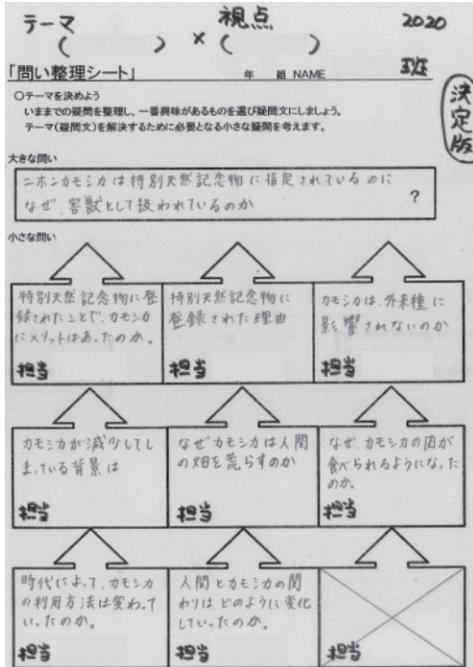


図11 問いの整理シートの内容

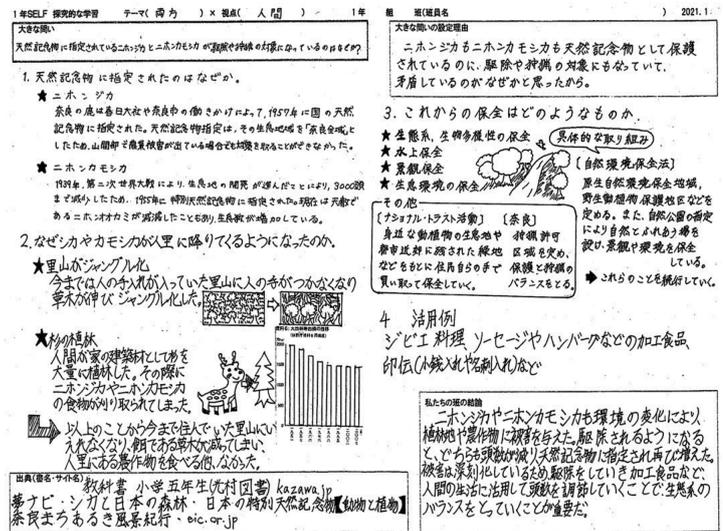


図12 4人でまとめた学習のまとめ

6 領域 環境 富士山と私たち I ~ 「私たちにとって富士山」とは～

本題材を通して育成したい資質・能力として「情報収集能力」、「情報分析能力」、「情報選択能力」が挙げられる。本学習は、2年次につながる富士山学習の動機づけを行うとともに、一人ひとりが富士山についてより深く学びたいという興味・関心を引き出すことを目的とする。「ニホンジカとニホンカモシカ」の学習との関連にも気づかせ、指導を行っていく。

授業の流れとしては、ガイダンス時に、「富士山マスターになろう」という大目標を掲げ、その目標を達成するために富士山に関する知識を学習を通して学び、「富士山のマスター度」を高めていくことを目指した。この富士山マスター度は最大で10合目として、1年時の学習の最後に自己評価させた。

学習のスタートとしては、生徒が持つ富士山に対するイメージを付箋に書き出し、KJ法で分類(グループ分け, ラベリング)を行った(図13)。その中で、生徒が興味・関心のある内容を選び、その内容についての小さな問いを設定した。生徒は、小さな問いの解決に向けて情報を収集したり、教師側から新たな資料を投入したりして、問いの解決と問いの深まりを生徒に実感させた。本活動も4人で1グループで学習を行った。学習を進めていく中で、生徒たちに視点を与え探究学習を深めていった。ここでは、生徒たちに多面的・多角的な視点(人と時代)として、「山梨県人」や「静



図13 KJ法でグループ分けした様子

岡山人」といった「人」,「江戸時代」や「令和時代」といった「時代」を与え,それらの組み合わせから問いを立て,富士山学習パートⅡにつなげるための仮説を立てた。合わせて,仮説の解決のために必要な情報は何かということポスターにまとめさせて発表した(図14)。なお,仮説の形式は,「富士山とは〇〇の人にとって△△である」と統一して行った。

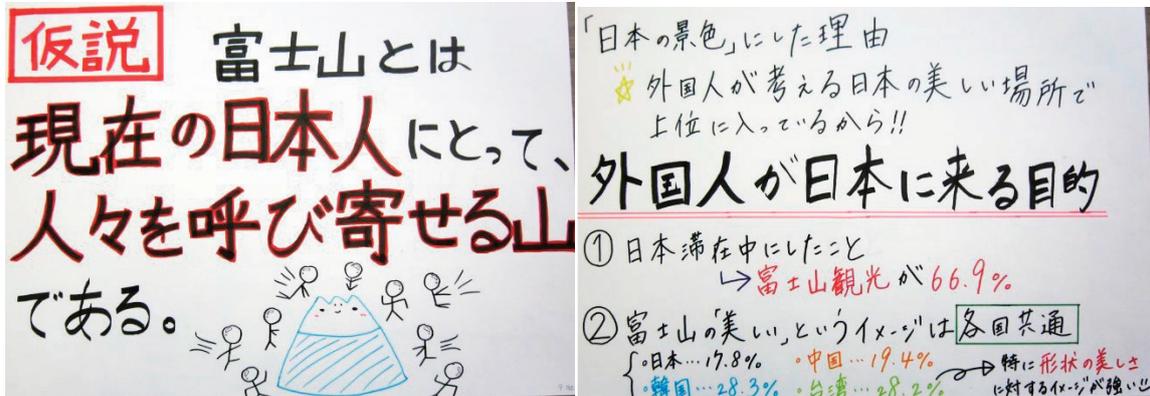


図14 生徒の立てた仮説

Ⅳ 授業実践の実際 (令和3年度 2年次)

1 領域 環境 富士山と私たちⅡ

～「私たちにとっての富士山」とは何か～

本単元では,1年時に行った富士山学習をベースにしてさらに深める学習を行った。育成を目指す資質・能力は,「課題設定」「情報収集・選択」「表現」である。KJ法を用いて,富士山に関する知識を付箋に書き出し,内容毎にグルーピングし,ラベリングした(図15)。ラベリングの結果は,「自然」,「林業」,「観光」,「歴史」の4つに大きく分けられ,それが視点となって学習を行った。その後4つの中から「中心となる視点」を1つ決め,そこから探究を「広げる視点」を決定した。視点が決定したらグループごとになぜその視点にしたのかという理由を合わせて発表・交流した。その後の学習の流れとしては,視点に関する小さな問いをグループでどんどん出して,グループ内で分担して小さな問いの解決のための情報を収集した。その結果,解決したものと解決しなかったものに分け,そこから調べてもわからなかった問いから大きな問いにつなげていった。グループでの進捗状況を適宜教員の方でチェックして進めていった(図16)。



図15 KJ法でグループ分けした様子

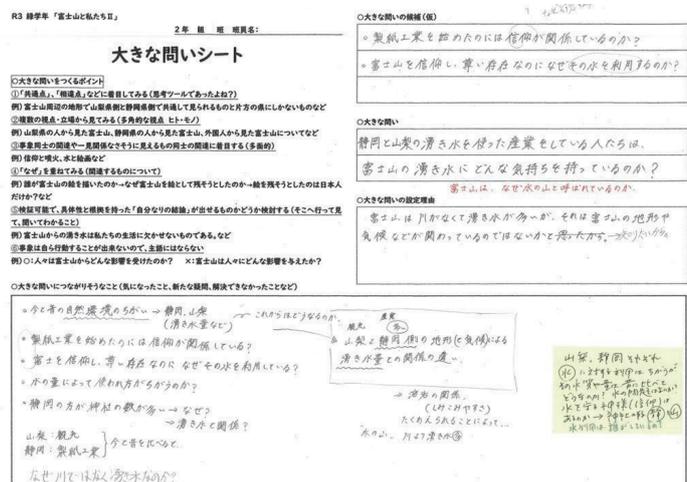


図16 班で作成した大きな問いシート

1 書院造	2 着物	3 土器	1 箏	2 尺八	3 和太鼓
8 音楽 (古典など)	テーマ 日本の伝統文化	4 仮名文字	8 三味線	(8) 節について 音楽	4 中国
7 茶道	6 仏教	5 和食	7 子守歌	6 歌舞伎	5 びわ

図 20 日本の伝統文化のマングラート

合わせて、「伝統文化」と聞いて生徒たちはそれぞれイメージするものが違っていることが考えられたため、意見を出しあい、クラスとしての定義を考えさせた(図21)。その定義に沿うような形で個人でテーマを設定していった。テーマを設定させ、その情報を集める中で生徒たちはSELFの部会で作成した「大きな問いチェックシート」を活用して学びの様子を記述させた。本チェックシートを用いることで、進捗状況を教師がチェックしながら学習を進めていった。学習のまとめとして、収集した大きな問いに対する結論をまとめ、発表する資料にまとめた(図22)。発表後に個人レポートを作成した(図23)。

2-1 日本の伝統文化
定義
江戸時代以前から
あったもので、今もなお
原型をとどめており、
先人の思いや生活様式
が大事にされていて、
日本発祥の現在も
うけつがれているもの。

図 21 クラスで考えた日本の伝統文化定義

日本の伝統文化と私たち 令和3年度 緑学年SELF
なぜ人々は、日本の楽器・その奏で方を **西洋音楽の影響を受けずに現代へ残したのか?**
— 設定理由 —
西洋の影響を受けなかった日本の音楽で、大切にされた理由を知りたいから。

● 様々な目的に応じて人々は
習い事 収入 音楽と関わる
劇場音楽 祭り
● 楽器を使う場面
結論 例) 法螺貝、柏子木
人々の生活の中で、多くの目的に音楽が用いられ、日本で伝統的に親しみ馴染んできたものだから。

図 22 日本の伝統文化の発表資料

2年SELF 緑学年 探究的な学習 私の結論に至るまで ~日本の伝統文化と私たち~ 2年 組 番(56) 2021

中心となる視点(音楽) × 広げるための視点(歴史)

日本音楽と人々
※奈良時代に大陸から伝来、平安朝に完成。
貴族(奈良・平安)、「雅楽」が宮廷で演奏された。
祭礼・信衆(平安・鎌倉)、「和歌」や「能楽」が庶民に広がり、神社・佛社の儀式を中心に発展。
江戸時代 民謡、平家物語、狂言、浄土宗を中心とした庶民文化が中心に発展。
江戸時代 御伽草子、能楽、狂言、劇場音楽「芝居」が庶民の間に受け継がれてきた。
歌舞伎で 貴族以外の人が楽しむようになった。
後には三味線、尺八の間に習い者が多く、芝居好きの男性も少なくなくなった。

日本の伝統楽器 「17の楽器に分類(の種類あり) ↓ 入まかに...」
正座の座敷は不明
弦楽器 — 吹奏楽器 — 打楽器
箏と琴 (違いは柱の有無) 笛 笙 尺八
琵琶 胡弓 箏 尺八
三味線 尺八
法螺貝(平安...山崎信綱に用いた) 尺八
柏子木(歌舞伎・浄土宗に用いた) 尺八

西洋の影響 明治の文明開化
西洋音楽が主流になり、クラシック音楽が教育に用いられ、日本の伝統音楽は衰退していった。
2002年度~ 中学の音楽授業で和楽器の体験が注目された。

私の大きな問いに対する結論 日本音楽は、昔から貴族や庶民、僧侶など、様々な目的で演奏された。多くの人が目的に応じて演奏された。西洋音楽が日本に伝来する前は、日本に近いアジアの影響を強く受けて、人々の生活に馴染んできた。今も伝統的な目的で大切にされている。西洋の関わりは多いが、日本が大切にしているのは、先人の思いや生活様式が大事にされていること。

出典(和・洋) 『ニッポンの伝統音楽』(角川文庫/2011.6.30)
『和の日本楽器入門』和楽器のルーツをたずねて(角川文庫/2005.4.30)
www.2.joc.go.jp
https://hoo.atsuman.com
https://spc.jst.go.jp

図 23 日本の伝統文化の個人レポート

4 領域 国際理解 22世紀に残したい日本の〇〇
パートI (同期型オンライン授業で実施)

本領域は新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、学校が臨時休業中に行った学習である。本学習は、3年時の22世紀に残したい日本の〇〇パートIIにつながる内容であり、修学旅行に向けてつながる学習でもある。育成を目指す資質・能力は、「情報収集・選択」「表現」である。授業の流れとして、ガイダンス時に日本の伝統文化の学習を受けて、修学旅行で訪れる京都に焦点を当てて学ぶことを知る。まずは、京都の伝統文化について生徒たちに知っている知識をウェビングマップで書き出させた(図24)。その後マンダラートを活用して興味関心がある視点の絞り込みを行った。今回の視点は、京都に見られる日本の伝統文化に関わる「庭園」「建築」「仏像」「美術」の4つを示し、もっとも興味のあるカテゴリーを個人で選択させた(図25)。なお、このカテゴリー毎に修学旅行の2日目のタクシー見学グループ編成を行うことも伝えた。4つの視点の中から選んだ1つの視点についてマンダラートを行って記入し、情報を収集させた。



図24 ウェビングマップ(京都の伝統文化)

1 池庭	2 枯山水	3 露地
8	テーマ 庭園	4 自然
7	6 寺	5 緑

1 白砂	2 水	3 石
8	(2) 園について 枯山水	4 植栽
7	6	5 景物

図25 庭園のマンダラート

5W1Hシートで小さな問いを出させた後(図26)に、情報カードで必要な情報収集を行った。その後、もっとも興味のある文化や文化財を選択する。その後、大きな問づくりを進めていく。大きな問づくりを進める上で、問いのレベルについて確認する。そして、大きな問いをつくることを目指して、小さな問いを積み重ねていくことを確認する。2年時の終わりに中心的な視点と広げるための視点、そして仮の大きな問いを設定させて3年時の学習に繋げた(図27)。オンライン授業はZOOMを活用して学年一斉で授業担当が行った。

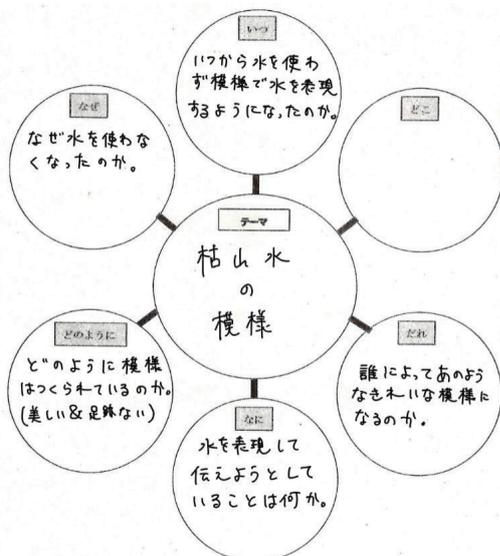


図26 5W1Hシートを活用した小さな問い

○中心的な視点と広げるための視点

(庭園) × (宗教)

○大きな問いの候補(仮)

臨濟宗は枯山水の様式の庭園も多し、池庭もあるのはなぜか。

図27 中心的な視点と広げるための視点

以下、学びの記録が記述された旅行記の一例である（図31）。

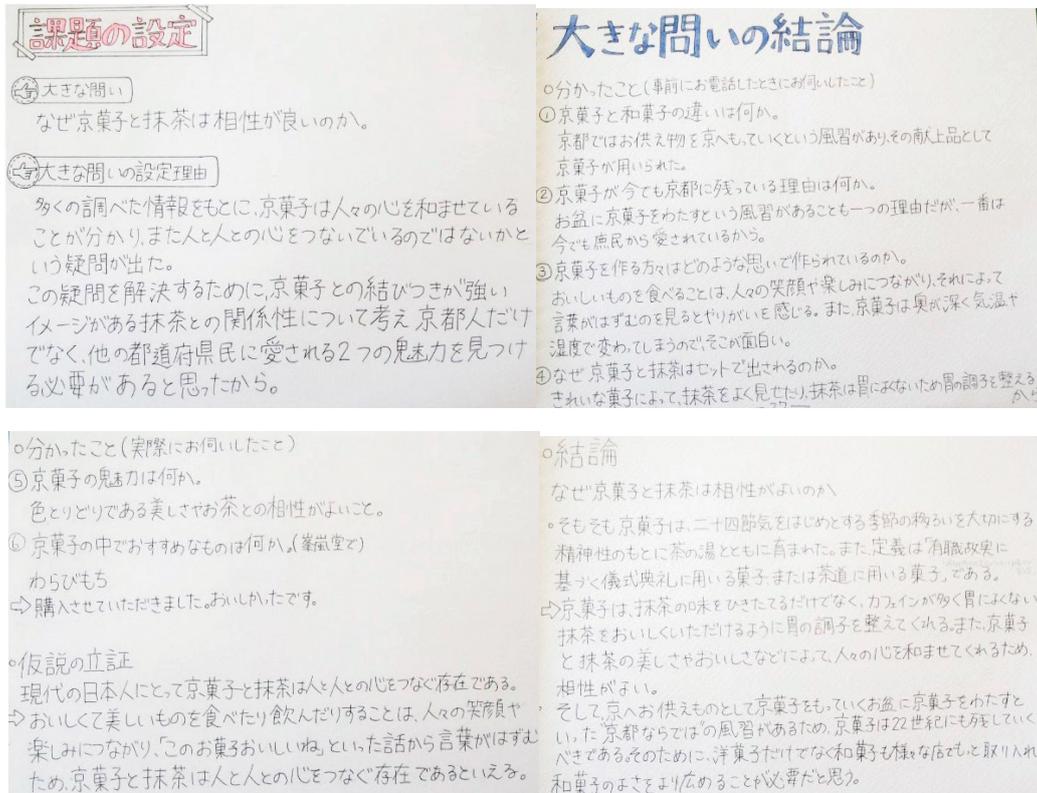


図 31 旅行記に記載された大きな問いとその仮説およびその結論

(5-2) 領域 総合的探究学習 「卒業研究」

本単元では、中学校の探究的な学習の集大成として各自で設定したテーマに基づいて探究学習に取り組ませる。本学習は、年間を通して行い、22世紀に残したい日本の〇〇パートⅡと同時進行で行った。

卒業研究の目的や具体的な学習過程などについてガイダンスで説明を聞き、これまでの学習を振り返り、関心のある教科や領域、単元、キーワード等を列挙し、自分の探究する内容について焦点を定めていく。関心のある教科や領域、単元、キーワード等を組み合わせて、テーマを設定し、テーマについての情報を収集し、大きな問いを立てる。その後大きな問いに対する結論の見通しを考えさせるとともに、結論を導くために必要となる仮説を立てさせた。そして、仮説を立証するうえで必要な情報となる小さな問いを立て、情報を収集する。調べた情報の整理・分析と情報の収集を繰り返し行い、自分なりの結論を立てる。ある程度、情報が集まってきたら卒業レポートの構成を考え、論文の執筆に入った。まとめる際に研究の成果を要約レポート（レポート集用）に書いた。12月に中間発表、2月に最終発表をGoogleスライドを用いて行った。その際に、生徒は学習者用端末（iPad）内のロイロノート・スクールに提出されたレジユメを見ながら発表を聞いた。なお、中間発表後に仲間の発表を聞いて自身の発表方法や内容について振り返らせ（図32）、2月の最終発表に向かわせた。

1校のスライドに文字が多くて、見にくかった部分があった。今回のスライドはレジュメの内容を全て書き返そうとしてしまっている部分が多かった。レジュメも同様に、文字ばかりで見にくかったのではないかと感じる。次は、人が見ておもしろいと思えるようなものを作りたいと思う。全体的に、表や図を使うことができていなかったという点、今回のためが所かと思った。

論の構成は、少し違ったと思った。今回は脳タイプ→環境→国・地域の順に話すことにしていたが、脳タイプ→国・地域→環境の順の方が伝わりやすいと思った。同様のことに注意して論を展開させたいと思う。

根拠となる情報は少し薄かったと思った。より皆を納得させられるような根拠をもう少し集めたいと思う。

今持っている情報を見やすく準備しておきたいと思った。また、次は文字だけでなく図や表も入れたいと思う。

次の発表では、すべての人が、「わかりやすくおもしろい」と思えるように、スライドやレジュメを見直していくべきかと思った。

図 32 仲間の発表を聞いて自分に足りないと感じたことや気づいたこと（生徒記述）

VI 考察

1 3年間の学びの振り返り

令和5年2月24日に緑学年の生徒134名を対象とした3年間のSELFの学習の振り返りを行った。その記述内容から成果と課題について論じていきたいと思う。3年間のSELFの学習では、表の6つの力を育むことを目的として取り組んできた。生徒に身についたと考えられる力を表6から3つ選び、記述させた。併せて、その割合も示す。

表6 SELFの学習で身についたと思う力とその割合

①課題を設定する力	50.7%
②必要な情報を収集する力	43.3%
③正しい情報を選択する力	53.0%
④得られた情報を分析する力	51.5%
⑤得られた情報や考えをわかりやすく表現する力	66.4%
⑥これまでの学びを振り返る力	17.2%

①課題を設定する力については、134人中68人（50.7%）が身についたと回答した。その理由としては、「興味がある内容で課題を設定して探究学習を進めることができた」、「1, 2年時に行った問いを立てることが苦手であったが、3年の卒業研究の際に生かされた」、「探究学習の土台となる小さな問いや大きな問いづくりの活動の大切さを学んだ」といった意見があがった。探究学習のスタートの際に必ず課題を設定するが、1年、2年の学習を積み重ねてきて最後3年生で行う卒業研究に活かされたと感じている様子が明らかとなった。これからも、問いを立てることを重点的に行っていきたい。

②必要な情報を収集する力については、134人中58人（43.3%）が身についたと回答した。その理由としては、「かちもない」の考え方を大切にしていきたい、「仲間からフォームで情報収集した」、「多角的に情報を集められた」、「必要な情報が何かわかるようになった」、「目的の情報に最短で行きつくことができるようになった」、「本やインターネットといった複数のメディアで情報を集められるようになった」といった意見があがった。「かちもない」とは、東京都立高等学校学校司書会ラーニングスキルガイドプロジェクトチーム内でまとめられた考え方で、「かいた人は誰?」、「ちがう情

報と比べた?」,「もとネタは何?」,「なんの目的で書かれている?」,「いつの情報」の頭文字をとったものである。「かちもない」の考え方を通して、情報を見極める上で必要となる態度を育成していきたい。また、一人一台端末が導入され、様々なメディアで情報収集を行うことが当たり前に行える環境となった。それぞれのメディアの特性を押さえた上で、情報活用できる力をSELFの学習を通して育成していくことを心がけていきたい。

③正しい情報を選択する力については、134人中71人(53.0%)が身についたと回答した。その理由としては、「たくさんある情報から必要な情報を得られた」、「出典を意識して情報を見ることができるようになった」、「都合の良いものだけでなく、悪いものも含めて考えられた」、「Wikipediaは情報の信頼度が低いことをM活を通して学ぶことができた」、「常に最新の情報や出典を意識することができるようになった」といった意見が挙げられた。この力をさらに伸ばすためには、一つのメディアだけではなく、複数のメディアで同様の内容についての情報を収集し、考えることを指導し続けていくことを心がけていきたい。

④得られた情報を分析する力については、134人中69人(51.5%)が身についたと回答した。その理由としては、「卒業研究の際に得られた複数の情報を比較しながら自分なりに分析することができた」、「KJ法やベン図などの手法を活用してデータから情報を分析し、分類することができた」、「得られた情報を批判的にみてそのままのみにしないようにすることができた」。この力をさらに伸ばすためには、「情報を鵜呑みにしない態度」、「取捨選択する力」が大切になってくると考えられる。

⑤得られた情報や考えをわかりやすく表現する力については、134人中89人(66.4%)が身についたと回答した。その理由としては、「富士山学習のまとめを仲間と協力して行うことができた」、「レジュメ、画用紙や論文など様々な方法でまとめる力がついた」、「資料の見せ方(図や表)など工夫してできた」といった意見が挙げられた。この項目が高い結果となった理由としては、それぞれの領域で様々な方法でまとめを言うことを行ってきたことが考えられる。それぞれのまとめ方を身につけることにつながったことが示唆された。中でも、卒業研究では自分の研究した内容をわかりやすく他者に伝えるために何が必要かということを考えながらスライドを作成することを伝えたことが考えられた。

⑥これまでの学びを振り返る力については、134人中23人(17.2%)が身についたと回答した。その理由としては、「調べ学習の後に振り返ってうまくいかなかったところを次に生かすことができた」、「毎時間の振り返りをして質の高い学習を行った」、「仲間との交流から自分の学びの振り返りができた」といった意見が挙げられた。

2 課題について

表6の①から⑥の資質・能力の中で、生徒の回答が最も低かったものは「⑥これまでの学びを振り返る力」であった。毎時間の授業で振り返りを記述する時間を設定してきたが、その質を高めていくことが今後の課題として考えられた。そのための方策として、振り返りの際に「視点を伝えて記述を促すこと」が考えられた。例えば、振り返りに記述する内容が「感想」や「学習したこと」を記述するのではなく、「どんな点が苦勞したのか」、「うまくいかなかったところはどんなところか」等どんな点を意識して学習を進めたのかということを記述させることを心がけていきたい。

VII 今後の展望

1 SELFと教科の関わり

生徒の記述結果から、SELFの学びが複数の教科で理科と数学の内容（運動の様子と二次関数）を関連づけて学びに向かうなど複数の教科の関わりに結びついた様子も見られた。

また、卒業研究の場面では個人個人が各教科に興味を持ってテーマを設定したこともあり、様々な視点で関連を見いだしている様子が見られた（図33）。今後も、教科横断の視点をもち指導に当たっていく。表7にSELFの学びと教科との関わりが感じられた場面を示す。

理科の運動(3年生の時の学習)で、3年間のSELFの学びが活かされた。特に、⑤「得られた情報や考えをわかりやすく表現する」が活かされた。理科の運動では実験で、運動するときに斜面と運動する向きと平面で運動する向きとどの向きが速いのか何が分かるか、という問いに対して考えを書いた。実験の結果から、それを記録して棒グラフにしてみました。そのグラフからは、片方のグラフは速さが一定になっていて、もう一方は、二次関数のように増えていることが分かった。このおりに実験したことをグラフ化し、グラフからどのような読み取りが、分かるか、ということがつながりがあると感じました。

図33 生徒の記述の様子

表7 SELFの学びと教科との関わりが感じられた場面

教科	SELFで生かされた内容
国語	新聞作り，文章の読み取り，批判的に情報を読み取ること，必要な情報を選択してプレゼン
社会（地理・歴史・公民）	山梨県の歴史や産業，グラフや表の読み取り，山岳信仰，シンキングツール（ウェビングマップ，ベン図，ダイヤモンド図），インフォームドコンセント，茶道について，ユネスコ，ジェネリック薬品，庭園，大きな問いの解決のためのプロセス，能や狂言，歌舞伎，SDGs
数学	課題に対する解決の道筋，結果をグラフや表にまとめる，必要な情報を集める，確率
理科	電気，回路，生態系，火山，光の反射，天気，結果（情報）をどのようにして解釈して考察するか，環境問題，SDGs，動物，食物連鎖，シンキングツール（ベン図），課題解決（実験）のためのプロセス，グラフや表の読み取り
音楽	能，狂言，歌舞伎，自分自身の学習を振り返る，作曲家やその人の曲の特徴
美術	仏像，富士山の絵
保健体育	睡眠，自分自身の置かれている様子を客観的に認識，たばこや薬物，健康
技術家庭科	情報活用，情報収集，スマホ，木の性質，衣食住，料理，ロボコンの制作過程，電気自動車，AI
英語	調べ学習，学びを振り返る，シンキングツール（ウェビングマップ），もっている知識を英作文に生かす，レッドリスト（絶滅危惧）
道徳	伝統文化を受け継ぐ人の思い，人と物のつながり
全教科	プレゼンの場面での資料作成（グラフの作り方や見せ方，スライドの作り方），情報の選択，テーマについて疑問をもつ，必要な情報の収集

2 SELFの学びが生涯にわたって生かされること

生涯学習についての視点で生徒に質問をした結果、「自分の知りたいことを突き詰める力（企業のプロジェクト）」、「考える力・判断する力，正しい情報を選択する力」，「必要な情報の探し方（情報検索力）」，「常に『疑問』をもちその答えを自分の力で導き出すこと（進路選択）」，「プレゼン力（わかりやすく聞き手に必要な情報を伝える）」，「一つの物事を様々な面から見て他の内容と関連させて考えること」，「情報を分析する力」，「粘り強く課題に対して向き合い解決しようとする気持ち」，「仲

間と協力して一つのことをやり遂げる力」,「与えられたことだけをやるのではなく自分で興味を持ち探究すること」といった意見が挙げられた。

2023年7月に本校を卒業した甲府一高校探究科の生徒が、本校3年生(R3年度入学生)に向けて探究課題についてのプレゼンを行った。その内容の中で「自分で決めたことをやり抜くことの重要性」を伝えていた。これぞまさに本校の学びが生涯にわたって生きていくことを体現した姿である。我々教師もそのような生徒が今後も輩出されるように指導に当たっていききたい。

3 学校図書館の有効活用

「これからの学校図書館の整備充実について」の資料中で、「学校図書館は、授業の内容を豊かにしてその理解を深めたりする『学習センター』としての機能とともに、児童生徒や教職員の情報ニーズに対応したり、児童生徒の情報の収集・選択・活用能力を育成したりする『情報センター』としての機能を有している。」と述べられている。本校では、これまでにSELFを核として学校図書館の利用が積極的に行われてきた。その取り組みの様子を中等教育資料の1032号「学校図書館を活用した授業づくり」として取り上げていただいた。今後も引き続き学校図書館の積極的な利活用を通して、生徒たちの知的好奇心を醸成することができるよう学校全体で計画的に指導に当たっていききたい。

VIII 謝辞

本実践は、これまでの本校に勤務した職員の実践の積み重ねの上に得られたものである。附属中に勤務された歴代の職員の皆様に深く御礼を申し上げます。また、日々刻々と変化する新型コロナウイルス感染症対策に苦心する中、一丸となって取り組んだ学年の教職員の皆様にも改めて感謝します。

IX 参考文献

- ・平成11年度 山梨大学教育人間科学部附属中学校 研究紀要
- ・平成12年度 山梨大学教育人間科学部附属中学校 研究紀要
- ・平成13年度 山梨大学教育人間科学部附属中学校 研究紀要
- ・平成11年度 研究開発実施報告書 研究主題・副主題「自分づくり」を支援するゆとりある教育課程の創造―「生きる力」を育成する学習活動の工夫を通して―(第1年次) 平成12年3月 山梨大学教育人間科学部附属中学校
- ・平成12年度 研究開発実施報告書 研究主題・副主題「自分づくり」を支援するゆとりある教育課程の創造―「生きる力」を育成する学習活動の工夫を通して―(第2年次) 平成13年3月 山梨大学教育人間科学部附属中学校
- ・平成13年度 研究開発実施報告書 研究主題・副主題「自分づくり」を支援するゆとりある教育課程の創造―「生きる力」を育成する学習活動の工夫を通して―(第3年次) 平成14年3月 山梨大学教育人間科学部附属中学校
- ・平成28年 文部科学省 これからの学校図書館の整備充実について(報告) p8~p15
- ・東京都立高等学校学校司書会ラーニングスキルガイドプロジェクトチーム 「探究に役立つ!学校司書と学ぶレポート・論文作成ガイド」 2019年 p54~p57
- ・中等教育資料 学校図書館を活用した授業づくり 令和4年5月号 p22~p27 文部科学省教育課程課編集